
いつか太陽に

桜浪貴途

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつか太陽に

【Nコード】

N1438Z

【作者名】

桜浪貴途

【あらすじ】

夕風太陽は『名前負け』と呼ばれる少年。自分を嫌い、世界を嫌う彼は変わることが出来るのか。又は変えることが出来るのか。名前で戦う物語始まります。

序章 名前負け

夏休み前日の放課後、終業式を終えた夕凧太陽は体育館裏にいた。授業が終わり、帰ろうとした彼を引き止めたのは同級生の男子達だった。

今時、体育館裏ってなんて、と思いながら太陽は冷静だった。彼にとってはよくあることだ。

なぜなら彼は・・・

「ぐあつ!!」

左頬を殴られる。

(はは、今時、体育館裏か)

尻餅をつき左頬を押さえながら太陽はそんなことを思う。

「おいおい、どうした?」

三人組の男達の今太陽を殴った男が嫌み混じりに言った。

「やっぱりてめえは『名前負け』野郎だなあ」

その『名前負け』という言葉聞き太陽の肩が震える、震えは体に広がり太陽は立ち上がった。

しかし、

「.....」

彼は何も言えなかった。

「まあお前が『名前負け』のおかげで俺たちは生きてるらしいけどなあ」一人がそう言い、

「夏休み前にたっぷりと殴らせてもらうぜ!!」

もう一人がそう言うと全員で太陽を殴り始めた。

殴る、殴る、蹴る、蹴る、蹴る

太陽はそのまま何の抵抗も出来ず、何の反論も出来ず意識を手放した。

第一章 関わり合うこの世界（一）

二年前から日本で生まれる子供に親が名付けることが出来なくなつた。

生まれたばかりの子供の額に文字が浮かび上がり、親はなぜかその文字を名前にしてしまう。

一部では神からの贈り物だと述べる者もいるがそう思っても仕方ないだろう。

なぜならその名前には『力』が宿っているのだから。

この力を後に【名技】と呼び、名技を持つ者を【名手】と呼ぶ。名手の中でも特に優れた名技を持つ者を【名将】と呼ばれた。

名技を最初に発現した者は雪代白染という子供だった。

彼は一歳で名技に目覚め、その名のとおり『全てを白く染める』力を持っていた。

だが彼が名技を使ったのは一度だけである。『この世にある兵器を全て白く染める』

これは今現在ある兵器だけでなく記録も作り方も未来永劫消す、という意味合いであった。

こうしてこの世界から兵器はなくなり名技だけが残った。

十

夕凧太陽は携帯の着信音で目を覚ます。

「ぐっ、くそっ誰だよ」

体中の痛みに耐えながらポケットから携帯を取り出す。

「未重か」

相手を確認し倒れまま電話に出る。

「あつ太にい？」

あかしみしげ
明石未重の声を聞き太陽は眉を歪ませる。

「おい未重、僕のこととはそつちで呼ぶなって言ってるだろ。それに
お前は妹じゃない僕は一人っ子だ」

「はいはい、夕にいね夕にい」

軽い感じで言う。

「それに妹じゃないって殆ど妹みたいなもんじゃない？ウチ」

「違う、お前は一つ下の赤の他人だ」

太陽は突き放すように言う。

「皮肉はいいから」

「皮肉じゃない、僕は・・・一人ぼっちさ」

太陽は自分に言い聞かせるように、最後の方は呟くように言った。

「僕は『名前負け』だからな、親にももう見放されたよ」

未重が言い返すより先に言葉を紡ぐ。

「太には『名前負け』じゃ」

「お前には分からないよー 人しかいない名将『十将』の一人のお
前には絶対に分からない」

未重がすべてを言い終わらないうちに太陽は彼女の言葉を遮った。

「そんなことないよ」

弱々しく未重は言った。

「そんなことあるんだよ！！だから僕は今こうして、いつっ！」

否定しようとして体まで動かしてしまった。

「どうしたの?!」

未重は太陽の様子が変わり慌てて聞いた。

「何でもない、ちょっと躓いただけだ」

事実を隠す。

知られたくなかった。

だから平気で嘘をつく。

「太にい」

未重は諭すような声で太陽を呼ぶ。

「ウチ知ってるよ、太にいが嘘ついてるの」

しかし未重はそんな彼の嘘を気づいていた。

「すぐ行くからどこにいるの？」
だが………

「………」

太陽は電話を切った。

何の躊躇も迷いもなく切った。

自分を心配してくれた自称『妹』を断ち切った。

人との繋がりを簡単に切れる。

彼はいつでもこんな風に生きてきた。

十

太陽は自称妹との通話を終えた後に体を休ませて今は高校の帰り道を歩いていた。

（あいつ、今も僕のこと探してるのか？）

そう思った後未重にメールを送った。

『大丈夫だから、お前は帰れ』

すぐに返信はきた。

『わかった』

とだけ書いてあった。

その内容にほっとした太陽は夕食のことに頭をシフトチェンジした。

太陽は学校の寮に住んでいるが食事は出ないので自分で用意しなければならぬ。

名手たちは日本に重要視されている、だから学費や生活費は支給される。太陽一人分の食費は余裕であるので問題ない。むしろ余るくらいである。

（夏休みになるし冷やし中華にでもするか）

太陽が夕食を決めて商店街に向かおうと曲がり角を曲がると、

世界が白く染まった。

夏なのに目の前一面雪景色になったかのように見えた。

太陽が目を擦り再び目を開けると、

そこには雪景色ではなく真っ白い少女がいた。

白くて儂い少女。

そんな印象だった。

その少女は異様な雰囲気を放っていた。まるで近づくものを消してしまうような。

太陽は息を呑んだ。

そんな少女が、

犬に襲われていた。

「……………」

白い少女はワンピースを着ていた。背中には羽にも見えるヒラヒラが着いている。そのヒラヒラが引っ張られていた。(このパターンはやばいっ)

太陽は来た道を引き返そうとした。

が、時すでに遅し。

白い少女に絡んでいた犬が太陽に向かってきていた。

「やっぱりこのパターンかよ！」

尻噛まれた。

「ぎゃー!!!」

太陽は逃げようとするが、ガツチリ尻をやられている。

「痛い痛い痛いいいい」

太陽は昔から動物を引き寄せる体質だった。名技とは関係なし。

この犬は獰猛だったようだ。

「ローズヴェルトー帰るわよ」

その声を聞くと犬は走り去っていった。

犬から解放された太陽はうつ伏せになっている。

(ローズヴェルトって)

太陽が泣きそうになつてると上から声がした。

「大丈夫？」
これが夕凧太陽とマシロ・スノーホワイトの出会い
だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1438z/>

いつか太陽に

2011年12月8日01時56分発行